



タイトル Title	東アジア近代史学会第二回研究大会参加報告
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	東アジア近代史学会会報,5:103-104
刊行日 Issue date	1997-10
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90000415

Create Date: 2018-06-25

神戸大学大学院国際協力研究科 助教授 木村 幹

筆者は、去る一九九七年六月二日に早稲田大学にて開催された、東アジア近代史学会第二回大会において、個別報告という形で、「開化派・親日派・国内派 - 東亜日報グループからの考察」という表題で報告を行った。以下は、その際に感じた、大会の印象等に関する報告である。

大会に参加しての第一印象は、そこで展開される議論の多様性と視野の広さ、であった。

周知のように、従来の東アジア研究は、日本・中国・朝鮮・台湾等、地域別に分かれて行われることが多く、また、これらの交流が行われる場合にも、多くは特定のテーマに沿ったものに限定されるか、若しくは、ただ単にばらばらの研究を並列に並べるだけのものが多く、その意味で、個別研究と統一テーマの二本立てから構成される本研究大会の構成は意味深いものがあったと言える。また、参加者においても、現在研究の最前線に位置する最も生産性の高い研究者が参加しており、研究大会の壇上、また、周辺で展開された議論も非常に意味深いものがあった。

さて、このような意義深い研究大会であったが、同時に出席間もない学会の常として、運営上、その他の面で問題を感じる部分もない訳ではなかった。以下、この点について簡単にコメントしておくこととしよう。まず第一に気になったのは、本研究大会においては、限られた時間内に多くの研究報告が行われた結果として、時間的な制約が強く現れた、ということである。二〇分という報告時間については、報告者自身の力量で処理すべきものであろうが、ここにおいて気になったのは、その報告を巡る議論の時間をもう少し多く取るべきであったのではないかと、ということである。この点は、今回の研究大会でなされた報告の多くが興味深いものであっただけに余計に残念と思える点である。また、本研究大会のような、広範な地域を対象とする研究大会においては、各々の地域の「素人」が異なる地域の研究の意義を確認するためにも、この点は必要であったであろう。

また、第二の問題点は、報告の在り方の問題点である。時間の都合上もあったであろうが、筆者を含む多くの報告者は、報告の前提となる自らの問題意識について、より明瞭に述べる必要があったであろう。何故なら、本研究大会のような、広範な地域を対象とする研究大会においては、研究の内容もさることながら、各々の地域において、何が研究の焦点となっているか、そしてそれらの焦点がどのような研究動向から表れたものであり、今日までどのように考えられて来たか、を確認することが、実は最も重要な点であるからである。この点については、報告そのものにおいて行うか、若しくは、報告に先立って各々の地域の専門家がこれを整理する必要があったのではないかと、考える。

第三の問題点は、用語の混乱である。これは社会科学と人文科学の双方に基盤を置いて研究を行う筆者の個人的な感想であるが、このような研究大会を行う場合には、各々の地域の研究者間の有益な議論を行う前提条件として、例えば「近代」や「国家」、更には「ナショナリズム」や「民族主義」について、ある程度共通の言葉が用いられる必要がある。具体的に言うなら、例えば、「軍国主義」という言葉一つをとっても、研究者によりそのイメージは様々であろう。軍国主義のイメージを「日本の軍国主義」から組み立てた者にとっては、中国においては「そのような軍国主義はない」ということになるかも知れないが、それは結局、「日本と中国は異なる」ということと大同小異の結果しかもたらさないであろうし、控え目に言って、それでは異なる地域間の研究者が意見交換を行う意味は、少なくとも、少なくであろう。勿論、各々の研究者の研究スタンスやイデオロギーにより、これらが異なって使用されることはある程度避けられないことではあるが、にも拘らず、これらの用語が少なくとも他者のそれとは異なって用いられていることについては、報告者やそれに対してコメントを行う者は、認識している必要がある。このような点は、特に午後に行われたシンポジウムのような、共通のテーマに即して報告が行われる場合は、特に必要であったのではなかろうか。

第四に本研究大会の対象とする「地域」と「時代」の問題である。この点については、シンポジウム後の議論の際にも指摘されていたが、まずもって、本研究大会で言う「東アジア」、より正確に言うなら、「東アジア近代史研究」を行う際の「東アジア」がどこからどこまでを対象とすることのできるか、がある程度明確にされる必要がある。同様のことは「近代」についても言うことができる。各々の地域における「通説的な時代区分」はさておき、この「近代」という時代について、意味ある議論が行われるためには、やはり、各々の地域における「近代」がどのように定義されているか、また、その背景にある「近代」に対する考え方が明瞭にされる必要がある。それを単に一九世紀後半から二〇世紀前半まで、という時系列的な区分によって行うのか、或いは、ある特定の発展論を前提とする「発展段階」によって行うのか、によって議論の内容は大きく変化するであろう。

以上のような問題点を指摘しながらも、筆者はこれら全ての点において、本研究大会で様々な試行錯誤が行われていたことは、良く承知しているつもりである。これら全ての問題点は結局のところ、広範な視野を持った「近代史研究」を行う者は、均しく、最終的には「近代とは何か」という問題に直面せざるを得ない、ということの意味を以てしよう。勿論、筆者として、このような巨大な問題に簡単に結論が出せると考えるほどのオプティミストではないが、にも拘らず、我々が今後もこの問題と真正面から向き合わねばならないことは否定しがたい事実であろう。結局のところ、本研究大会の意義も問題点も、その同じところにあるのであり、その意味で、今後も本研究大会には大いに期待したい。そのことを確認して、筆者の報告に代えさせていただきたいと思う。